
神様の罪滅ぼし

霧野ミコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様の罪滅ぼし

【Nコード】

N0007D

【作者名】

霧野ミコト

【あらすじ】

初めての恋。ようやくやってきた初恋。だけど、それは、告白相手が来ないという、なんとも無様な結果で、終わりを迎えた。その代わりに出会った眼だけ赤い全身白づくめの神様だった。そんな神様と私のお話。

「……はあ」

本日の私のテンションは……

ため息付いているところから分かるだろうけど、最悪だ。

なぜかって？

そんな事は今更。

後生だから聞かないで欲しい。

というか聞かれたら、凹む。

きつと、その場に崩れ落ちる事は間違い……

「ああ、真帆^{まほ}じゃん？告白^{まほ}どうだった……て、悪かったわよ。悪かったから、そんな死にそうな顔しないでよ」

実際に聞かれたら、なんと、まあ、情けない事。

あっさり、その場に崩れ落ちる。

彼女　倅^{さち}の言う通り、私は今日告白した。

同じ学年のサッカー部の部長をしている人。

笑顔が爽やかで、言い方が少し古いけど、いわゆるイケメン、と言った感じの人だ。

その彼に、今日告白したんだけど、あっさりふられたのだ。

というか、振られた以前に、呼び出したところにすら来てもらえなかった。

あまりの切なさに、とりあえず、ロープが欲しくなるほどだ。

別にカッターナイフでもいいけれども。

「ほ、ほら、せつかくだから、気分転換にカラオケでもいいかない？思いつきり歌ったら、きつと気分も晴れるから」

そのあまりにもひどい鬱^{ふさ}オーラを、感じ取ったのだろう。

倅は一生懸命に、私の事を慰めようとしてくれている。

「壊しそうだから止めとく。」

とはいえ、そんなところに行く気分じゃない。

というか、行けば、マイクやらスピーカーやら何やらを壊してしま
いそうだ。

それぐらいバイオレンス……

もとい、アグレッシブな歌い方になりそうなのだ。

さすがに、その状態で行くわけにも行くまい。

「気、つかってくれてありがとね。んじゃね」

そう言うと、私は、彼女を置いて、また帰途につく。

それ以上に、彼女に当たってしまう事が怖いから、だ。

相変わらず、私の気分は晴れない。

まあ、一時間も待ったのに、全く来る気配もなく、人づてから、帰
って締まっている事を聞かされたのだ、そりゃ晴れるわけもないだ
ろう。

「はあ」

盛大なため息を付く。

なんだか、あまりにも切なすぎる。

せめて、断るなら、断るにしろ、返事ぐらいくれてもいいと思う。

というか、乙女の純情と時間を返せ、と叫びたいぐらいだ。

「なんて、そんなの自分勝手、か」

とはいえ、自分でも、それが自分勝手なわがままだって言う事ぐら
い分かっている。

こっちはほとんど一目ぼれみたいなものだし、向こうはこっちの事
は知らない。

今時、物凄く古い手法な手紙で呼び出して、告白しようとしたのだ。
当然、元々約束も取り付けてもないのだから、そんな事をいったと
ころで、滑稽でしかない。

「ちえ」

軽く息を吐き、空を見上げて、伸びをする。

とりあえず、しばらくの間は、この鬱気分はどうにもならないだろ

う。

普段は、女からかけ離れたような、男勝りな部分も多い私だけど、今回に関しては、ここまで来るのに、そうとう時間がかかったのだ。それだけに、そこから起き上がるにも、多少は時間がかかるだろう。まあ、周りから男勝りと言われても、結局のところ、私も普通の女の子と同じ。

どうにもこうにも、恋愛には勝てないらしい。

なんていったら、倅以外の友人には驚かれるだろうけど。

まあ、倅の話じゃ、彼女達は、ほとんど私の事を信仰の対象にしているみたいだし。

かつこいいお姉様、らしい。

ホントの私を知っている倅^{さち}にしてみれば、冗談にしか聞こえなかったみたいけど。

まあ、私も、倅の言葉に大賛成だが。

今回の事しかり、そして……

昔の事、しかり、だ。

「……昔の事、か」

そこまで行っただとところで、嫌な事を思いだした。昔の事。

今思えば、あの時の私は、本当に純粹だった。

今が、汚れてしまっているわけじゃないけど、それでも、今とは比べ物にならないほど、純粹で、単純だった。

それと比べると、やはり今の私は、汚れてしまっているのかもしれない。

なんて、らしくない言葉かもしれないけれど。

「……文句でも言いにいくかね」

それもこれも、やはり今回の告白もどきのせいだろう。

なら、私らしさを取り戻すために、愚痴りに行ってもいいだろう。

まあ、愚痴るにしては一方的かもしれないけど。

というか……

愚痴と言っているのかどうかも分からないけれど。

とんとん、と軽く階段を上り、門をくぐる。

ここに来るのは数日振り。

とはいえ、そんなにしょっちゅう来ているわけでもない。

前、来た時だって、かなり久しぶりのこと。

ざっと十年ぶり、といったところだろうか。

まあ、そもそも、そんなところにしょっちゅう行くような人はそうはいないだろう。

門をくぐった私は、すたすたと、地面を踏みしめると、目的地に向かう。

とはいえ、門をくぐってしまった以上、そこは目と鼻の先。

大して、息を切らせる事なく、その場にたどり着くと……

「このバカ野郎！！役立たず！！」

大声を張り上げて、盛大な文句を叫ぶ。

まあ、女としては少々恥ずかしい、汚い言葉遣いだが、そこらへんは気にしないで欲しい。

というよりも、気にする必要もないのだ。

なにせ、ここには人なんていない。

無人の場所。

とはいえ、門がある以上、何もないわけじゃない。

まあ、門と言うのも御幣があるかもしれない。

本来なら、それは鳥居と言すべき物。

そう、つまり、今私は神社に来ているのだ。

そして、文句を言っている相手というのは……

「私の真摯な祈りを返せ、この無能神！！」

神様と言う奴。

まあ、本当に、ここに神様なんているのかなんて知らない。

そんなものの存在を端から信じていない、というのもあるにはあるんだけど、それ以上に、ここは打ち捨てられた神社。

理由は分からないけれど、私が小さい頃から、打ち捨てられていた場所で、すっかりぼろぼろになっている。

まあ、そんなところに来て、お願いするのもなんだと思うけれど。とはいえ、お願いとかお祈りとかそういうのをするのは、私のキャラじゃないとされているのだ。

人が多く居るようなところでやるわけにもいかない。

ばれて、周りから何と言われるか、と思うと、たまったものじゃない。

そんな追求に耐えられるほど、それこそ周りが思ってるほど、私は強くない。

今の私は、虚勢でできている。

それもこれも……

「ああああ、もう、あんたのせいだからな!!」

そこまで考えたところで、それを払拭するように、大声を上げる。もう、終わった事なのだ。

昔の話し。

それを今更、どうこう言ったところで、どうにもならない。

過去は振り返って、アルバムを開くように、見る事は出来る。

でも、変える事は出来ない。

都合の悪い事は消して、新しく書きなおす。

そんな事は出来ない。

だから、今更、そんな事を考えても無駄な事。

せいぜい、ここで、盛大に文句でも言って、帰ってしまおう。

「とりあえず、役立たずなんだったら、その申し訳程度にしか残ってない社をさっさと打ち捨てて、まっさらな新地（ニューランド）にしろおせ!!」更に大声を張り上げて、罵倒する。

とりあえず、性別なんてとくに捨てているから、どんな暴言だつて、言える。

まあ、ここが無人だから、というのもやっぱりあるけど。

さすがに、ここに誰かがいれば、そんな言い方なんて……

「さつきから、すごいですね
できない。」

そう思ったところで、不意に声が頭上からした。
どこか、しっとりとした品があり、聞く物を穏やかにしてくれそう
な落ち着きのあるアルト。

何もかも全てをあずけたくなる声をしている。

けれど……

「え、あ、ええー！ちよ、誰！？」

あまりにもタイミングが悪過ぎた。

今、この瞬間で、そんな声が聞こえれば、誰だって驚く。

慌てて、振り返って見る。

そこには、一人の男の姿。

見目は、まさしく、これこそ人間離れしたほどの美貌、と言った感
じだろうか。

目も鼻も口も、どれを取っても、いびつなところはなく、全てが、
計算されつくされて生み出された奇跡の物。

そう呼べるぐらいのもの。

風を受け、さらさらと流れる髪も白く、肌もぬけるように白い。

それこそ、女の私が嫉妬してしまうほどの白さ。

唯一、色があるとすれば、それは、瞳だけ。

ただ、カラコンでも、つけているのだろうか、その瞳は、血の色の
ように真っ赤に染まっている。

けれど、その唯一のアクセントは、彼の着ている衣装には、良く映
える。

真っ白な着流しの和服と、真っ白な髪に、真っ白な肌。

その全身白の彼には、その血のような赤の瞳がよく映える。

「驚かせてしまったみたいですね、申し訳ございません」

思わず、その姿に見とれてしまっていたのだが、目の前の青年は、
私がまだ、驚いて固まってしまっていると、勘違いしたのか、しと
やかな笑みを、わずかに浮かべると、小さく頭を下げる。

その姿を見ると、見た感じは、二十代前半ぐらいに見えるけれど、なんとなく、雰囲気はそれ以上に見える。

それこそ、何百年と生きていても、不思議ではないほど。

「でも、貴女も、貴女ですよ？こんなところで、あんな大声をあげるなんて……私もびっくりしましたよ」

そんな私の内心など、全く分かっていないのだろう。

当の本人は、相変わらずしとやかな笑みを浮かべながら、言葉を続ける。

呑気な人だな。

そう思いつつも、彼の言葉を聞いて、赤面する。

やはり、聞かれてしまっていたみたいだ。

まあ、あれだけ、大声で叫べば、聞こえないはずがないだろう。

「えっと、その、お騒がせして、申し訳ございません」

とりあえず、謝ってしまうしかないだろう。

とはいえ、普段使い慣れてない敬語なんか使ったせいだろうか。

どうにもこうにも、違和感がある、というか、変な気持ちになる。

そのせいか、イントネーションも平坦と言うか……

なんか、棒読みのように、気持ちが籠っている変な感じになってしまっている。

「いいえ、別に気になさなくてもいいですよ。元はと言えば、

悪いのは私ですから」

「は？」

けれど、そんな事など気にしていないのか、目の前の青年はあっさりとは切り返してくる。

「というか、分けが分からない。」

そのため、思わず、思いつきり間拔けな声を出してしまった。きっと、今の顔も、すっごく間拔けな顔をしているだろう。

倅なんかが見れば、きっと爆笑する事間違いないだろう。

「貴女の真摯なお願いを叶えてあげなかった私が悪いんです」

「はっ?!」

けれど、そんな事お構いなしに続ける彼。

けれど、その言葉を聞いた瞬間、今度こそ、さっきとは比べ物にならない衝撃が来る。

思わず、頭の中が真っ白になる。

まさしく、フリーズ、と言った感じだろう。

頭の中が完全に凍り付いて、全く動こうとしない。

「本当に申し訳ございません」

一瞬、冗談かと思った。

さっき言っていた事を聞いていたんだから、たちが悪いけれども、それをまじえての冗談かと思った。

けれど、それを打ち消すかのように、ふわりと彼はそう言って、私の傍まで寄ってくる。

大地に足を付けずに。

一瞬、何かのトリックかと思った。

または、どつきりかと思った。

けれど、こんなところで、彼がそんな事をする理由が全くないのだ。私が思い浮かばないだけかもしれないが、その可能性だつてずっと低い。

それに、彼が持っている雰囲気はどうしても、それを頷かせてしまふ。

彼が人外の実在である事を。

「そのお詫びと言ったら、なんですが…」

そして、そんな私の戸惑いなんてよそに、彼はそつと私の肩を触れると

「私が貴女をお守りいたしましょう」

また、淑やかな笑みを浮かべると、そう言った。

「で、いつになったら、消えてくれるわけ？」

いい加減、言い飽きた言葉。

おかげで、そこに含まれる感情は、いろんな負の感情をこちゃ混ぜ

にされたような、もう一言では言い表せられないような、そんなものになってしまっている。

「私は、貴女を永遠に守ると……」

「そんなのいらない。不必要。よって、却下。断固却下。さっさと社に帰りなさい」

その理由はただ一つ。

あの全身白づくめの自称神様の青年。

彼が、私のストーカーになってしまったからだ。

彼の言葉では、姫を守る騎士だなんて言っているが……はつきり言って、迷惑。

もう四六時中べったりくっつきまわる。

それこそ、お風呂やトイレにまで付いて来られた時は、殺意が湧いた。

おまけに、それに対して声を大きくして文句を言えば

『ああ、大丈夫ですよ。真帆^{まほ}さんに欲情したりしませんから』

あっさり、そう切り返される。

なんだか、その瞬間に女としての尊厳を根こそぎ奪われたような気分になった。

落ち込む私の姿を見て慌てて彼は

『あ、いや、私は神ですから。そういった欲求がない。それだけの事で、別に真帆^{まほ}さんに女性としての魅力がない、というわけじゃないですからね』

そう言ってフォローをするが、それが余計に虚しくさせる。

何も言っていないのに、そこであっさり私の内心をずばりと当てたのだ。

少なくとも、私にさほど女性的な魅力がない、と思っているのだろう。

まあ、確かに私には女性的な魅力はないさ。

ああ、全くないさ。

いつまで経っても、大きくならない胸。

いつまで経っても、止まらない身長。

いつまで経っても、一向に治らないこの男勝りの性格。
どこをとっても、女らしくないでしょうさ。

ええ、ないでしょうさ!!

「ほら、また、何不機嫌そうな顔をしているんですか？せつかくのお顔が台無し……」

「そんな美丈夫な顔して言われたら、なおさら痛いわ!!」

しかも、こんな綺麗な顔をしている人間に目の前にいられたら余計に劣等感を感じてしまう。

こんな芸術作品と比べちゃいけない。

それは分かっているんだけど……

どうしても、比べてしまう。

みずばらしい自分と。

「大丈夫です。真帆^{まほ}さんは、綺麗ですよ？」

「だから、あんたにだけは言われたくないわ!!」

まあ、目の前にいるこの青年のせいで、比べたくなくても比べてしまふのだが。

本当に、どうにかならないものだろうか。

「やたらと疲れた顔をしてるわね」

昼休み。

ランチタイムとなったところで、倅の先制パンチ。

まあ、攻撃しているわけじゃないんだろうけど。

それでも、私にとっては微妙に痛いパンチだ。

ちなみに、自称神様のストーカーは、人通りが多くなってきたところで、黙り込んだ。

一応、私だけにしか見えてないみたいだから、当然と言えば当然。
中空に向かって話してたら、それこそ痛い人だ。

「何かあったの？」

ミートボールを食べながら、更なる追撃。

いや、攻撃じゃないんだから、そういう言い方はやっぱりしないで、もいいんだろうけど。

というか、今食べたミートボールはおいしそう。

あれが、倅手作りなんだから、びっくり。

私と同じくして、そういうものには縁がなさそうと思われるけど、実際はかなり出来る。

母親の身体が弱く、昔から家事を手伝っていたんだからなんだけど、この前食べさせてもらったプラムプディングはかなりおいしかった。一応、私も彼女と同じで、ある程度の家事が出来ると自負していたけど、その自信も瓦解。

とりあえず、再度自信を取り戻すべく、リベンジに燃えている。

「いや、別に、何もないけど？」

でも、それは今は関係ない事。

とりあえず、目下のところの問題を解決。

とはいえ、解決はどう頑張っても出来ないし、話す事も出来ない。ストーリーさんは、倅にすら姿を見せるつもりはない、と言っている以上、前あった事を言ったところで、信じてもらえないだろう。いいところ、失恋で妄想がたくましくなったと思われるお終いだ。よしんば信じてくれたとしても、それはそれで、なんとなく怖い。

「はい、嘘。とりあえず、今日は、いつも以上にかっこよかったんだからね」

とはいえ、嘘はつけない。

あっさり見破られてしまう。

というか、どうして、私の嘘を見破る手段が、格好良さなんだろう。いまいち、分からない。

「とりあえず、お姉さんに、ちゃきちゃき、話してしまいなさい」

「いや、ホントに何もないんだけど」

だからと言って、やっぱり言えない。

信じてもらえそうもない事を言うのも、なんだし、それに……

あの神社の事はあんまり言いたくない。

昔の事を触れてしまいかもしれないような話題には。

とはいえ、どうやって、煙に巻くか。

それが問題。

今までの通りじゃ、どうやっても無理。

絶対にすぐにばれる。

とはいえ、だからと言って、このまま無視してみたところで、追及の手を止めてくれるとは思えない。

よって、非常に困った状況なんだけど……

こういう時に限って……

「こんにちは」

人が来る。

まあ、いつも来ているんだけども。

「こんにちは」

天の助けに言葉を返す。

ちなみに、その天の助けは、男の子。

佐々木志麻君。（ささき しま）

学年は同じだけど、クラスは違う。

私達は通常クラスで、彼は進学クラス。

かなり頭が良く、進学クラスでも上位の成績を誇る。

とはいえ、彼を形容する言葉は、むしろ、そんなものよりも……

「相変わらず、可愛いわねえ」

隣の倅（さち）が、突然の乱入者に、強烈なハグ。

とはいえ、それも仕方ない。

彼女の言った通り、本当に可愛い。

小さな背に、愛らしいどんぐり眼。

小動物のように、細々しい仕草。

そして、何より……

「ちよ、やめて……やめてくださいってば。…やあ」

反応がすこぶる可愛い。

どこの乙女だ、と言わんばかりの反応。

どこを探しても、今時の女子高生には、そんな反応をするような輩はいない。

なのに、彼はそれをやってしまうのだ。

可愛いと言わずになんと呼ぶ。

「…て、わっ！ど、どこ触ってるんですか？！」

と、どうやら、倅さかちのやってる事がかなり度が過ぎて締まったらしく、ついに彼も少々ご立腹。

とはいえ、どんぐり眼でそんな事をされても怖くない。

と言うよりも、むしろ微笑ましいと言った感じだ。

「ほらほら、そうやって目くじら立てたら、せつかくの可愛い顔が台無しだよ？」

だから、思わず、彼の頭をぼんぼんとやってしまう。

いやはや、これでも、私も意外と少女趣味があったりする。

だからと言って、シヨタコンではないけれど。

「むー、子供扱いしないでください」

「はいはい」

とはいえ、拗ねくれた彼を見て、可愛い、と思ってしまう辺り、否定しきれないような気もするけれど。

「そつえば、ふられたらしいですね」

志穂君しまも参加したランチ。

それもそろそろ終わろうか、と言ったところで、不意の言葉。

どうやら、彼にも伝っていたらしい。

まあ、どうせ、倅さかちが話したんだろう。

変なところで、繋がっている二人だし。

もしかすると、付き合っているのかもしれない。

倅さかちが志穂君しま以外の男と一緒に居る姿は見た事ないし、かなりのお気に入り、過剰と行ってもいいほどのスキンシップもしている。

彼も彼で、それを嫌がっている様子もないし、どんな事をされて、尻尾を振って、ここに来ている。

とはいえ、相変わらず、二人の間に、恋人特有の甘い雰囲気は全く流れていないから、ありえないとは思うけれど。

倅さかちなら隠せるかもしれないが、どう考えても志穂君しまには無理だと思う。

感情がもろに出るタイプだし。

と、そんな二人の関係は良しとして、とりあえず、今の言葉。ちよつと耳についた。

というか、イラッと来た。

とはいえ、そんなに気にしてるわけでもない。

ふられた日はそれなりにショックはあったけど、それ以上に……

「？」

後ろに居るストーカーの事で手一杯で、そんな事はどこかに行ってしまった。

そう言う意味では助かったと言えば助かったんだけど、アフターケアはいいから、出来れば、それ以前の方に力を入れて欲しかった。

「でも、僕としては安心しました。安西君あんざいの事です……」
告白しようとした相手の名前だ。

「彼はあんまりよろしくないですからね」

「え？」

けれど、それは初耳。

思わず食いつく。

「女遊びが激しい、とまでは言いません。ただ、あんまりいい噂はないんですよ」

「男同士だと良く知ってるわね」

「そういう倅さかちさんも良くご存知で」

「ま、親友の思い人だもの、リサーチは当然よ。まあ、聞く耳持たないだろうから、何も言わなかったけど」

「僕も同じくです」

けれど、二人はそんな私など眼中にないのか、二人で勝手に話を進めてしまう。

まあ、確かに二人のいい分は最もだけど。きつと、言っても聞かなかっただろうし。変なところで、頑固だし。

だけど、それよりも、もつと気になる事。というか、後ろのストーカーの事、だ。

「あんた、知ってたでしょう？」

「なんのことでしょうか？」

「しらばつくれようとしても無駄よ？」

とりあえず、家に帰ると同時に、ふわふわ浮いていたストーカーを座らせて、問い詰める。

当の本人はいけしゃあしゃあとそんな事を言うが、無駄な事。分かりきっている事。

あの時、二人が話しているときの表情。

というよりも、私がその二人の話を聞いたときの反応を見た時の表情。

一瞬、くすり、と笑っていたのだ。

「もしかして、あの男性の事ですか？それでしたら、もちろん知っていましたよ」

さらに、きつく睨んでやったら、あっさりと白状した。

まあ、彼にしてみれば、隠す必要などないのだろう。

感謝される事はあれど、怒られる事はない。

私がどういう人間が分かっていれば、尚の事。

「私の事を思つて、何もしなかったのね？」

「はい。貴方に、あの男性はもったいないですからね。ですから、邪魔させてもらいました。貴方だって、それを知れば、付き合ったりなどしなかったでしょう？」

「……………」

私は、一途な恋なんて言うものは信じない。

そんなものを信じられるほど、少女少女しているわけでもないし、

それが出来るほど、簡単な世の中じゃない。

誘惑も多い、付き合ったからって、全てがばら色なんかなるわけじゃない。

だから、一途な恋なんて信じないし、多少の浮気も眼を瞑る。ただ……

「確かに、ルーズなのは、困るわね」
ルーズなのは、困る。

誰彼かまわずと言うわけでもないだろうが、それでも、二人の話を聞いたら、ルーズであるには違いないらしく、長続きはせず、とつかえひつかえの連続らしい。

しかも、付き合ってる最中ですら、別の女子といろいろとやってるらしい。

何をやっているのかまでは聞いていないが、だいたいは予想がつく。それでは、完全に女遊びが激しいとしか言えないが、二人は私の手前、そう言ったのだろう。

「ですから、僭越ながら、私は邪魔させていただきました」

「知らなかったのは、私だけ？」

「はい」

なんとも情けない話だ。

恋愛初心者だから、一発で見分けるのは難しいとしても、それでも面だけで全てを判断してしまった自分が情けない。

とりあえず、今回の事を教訓にして、今度はしっかりと中身を見ないといけないだろう。

それに、目下、進展中なのは、そんな事ではなくて……

「で、あんたは何をしてるのかしら？」

「あら、ばれちゃいました？」

のっそりと出てきた男子学生。

ストーカー二号。

とはいえ、彼にかかれば、なんだか微笑ましい。

それに、たぶん、彼は、私についてきたんじゃないと思う。

付いて来ていたんなら、ストーカー一号が気付いていたはず。

それに、気付かなかったんだから、たぶん、私よりも先か、または、後に来ただけ。

もちろん、私とは無関係に。

「あれだけ、がさがさとやられればね?」

「そうですか。真帆^{まほ}さんって、鈍感ですから、気付かないって思ってたんですが、ちょっと甘くみちやいましたね」

「どつという意味かしら?」

とはいえ、どうにもかなり甘く見られているらしい。

「そのままの意味です」

「上等」

どうやら、ここは、教育的指導をしないといけないみたいだ。

とりあえず、身体の方からじつくりと指導してみようかしら?

なんて、半分黒くて、半分桃色な思考をしていたのだけれども……

「女の子が、そんなはしたない言葉を使っちゃダメですよ。それに、志麻^{しま}君も、からかつちやいけませんよ」

余計な横槍。

「うっさい」

「いや、可愛いから、つつい」

「は?」

とりあえず、一言の下で潰すと、再度にじり寄ろうとする。

いや、よろうとしたところで、気がついた。

「でも、羨ましいですね。いつも一緒なんでしょう?」

「貴方も、伽耶^{かや}姫^{ひめ}といつも御一緒でしょう? あんな綺麗な女性と一緒にいるんですから、いいじゃないですか」

二人が、普通に会話している事に。

「伽耶^{かや}? あの人は、確かに見た目はいいけど、貴方と一緒に、性格が悪いですからねえ。この前なんか、押し倒されそうになりましたよ?」

「それは仕方ありませんよ。彼女は貴方の事が大好きですから」

「いや、それはそれで嬉しいんですけど、押し倒されるのはちょっと……」

「では、もうちょっと男らしくしてみては？」

「無理ですよ。それに、神様相手に、人間がどう足掻いたって無理ですよ」

「じゃあ、諦めて慰み物になってください」

「無茶言うなあ……」

というか、完全に私は蚊帳の外。

二人で、誰かの話をしている。

いや、まあ、聞いた感じでは、ストーカー一号と同じく神様なんだろうけど、なんだか、釈然としない。

というか、こんなに神様やらが大量発生しているのだろうか。

「まあ、なんにせよ、ちよつと真帆まほさんに話があるから、ちよつと外してもらえるかな？」

「襲つちやだめですよ？」

「そんな事を言うとは、伽耶かやさんに頼んで、しつけてもらいますよ？」

「ご容赦を。あの人は、あれを嬉々としてやりますからねえ……」

「ええ、存分に痛めつけられてください」

「分かりました。それでは……」

すつと、そう言うとは、ストーカー一号は消え、志麻君しまと二人きり。なんだか、変な感じだ。

「驚きました？」

「……思いつきりね」

けれど、向こうは気にしていないのか、普通に話しかけてくる。となると、こつちも負けられない。

お姉さん？としては、可愛い弟？に、弱みは見せられないのだ。

「とりあえず、ボクにも、真帆まほさんと同じく、神様が憑よいてます。

伽耶かや姫、って言う人なんですけどね。で、伽耶かやさんの繋がりむいで、神威むいさんと知りあったんです」

「……かむい??」

「そう言えば、神威^{かむい}さんの自己紹介全部無視ってたらしいですね。神様の神に、威力の威で神威。真帆^{まほ}さんの後ろにくつついてた、さっきの神様です」

「あー、そういう名前だったんだ」

とりあえず、今更新事実発覚。

まあ、たいして興味はなかったし、ストーカーとして、邪魔だったんで、必要不可欠な言葉しか交わさなかった。

だから、名前すら、知らなかった。

「はい。で、話して置きたい、と言うか、言って置かないといけな
い事があるんです」

我ながら、非常に呑気だな、と、まさしく呑気に思っていたんだけど、不意に志麻^{しま}君の表情がちょっとだけ変わる。

初めて見る真剣な目。

まるで、今にも愛の告白でもしようとしているかのようにも見える。

……もしかして、志麻^{しま}君の好きな人って、私？！

なんて、明らかにない事が分かっている事を考えてしまっ
たり、ちょっと混乱して居るんだろう。

普段見せない表情が、やたらと男らしくったりするからなのだが。

いや、意外と、これはこれでいける……

なんて、シヨタコン暴走を突っ走りかけていたんだけど、それも止まる。

「神威^{かむい}さんの事です。詳しくは言えませんが、今回、貴方に憑いて
いるのは、過去の罪滅ぼしだそうです」

彼の一言だ。

「……罪滅ぼし？」

「はい。ボクもあえて詳しい事は聞かなかったんですが、昔彼は真帆^{まほ}さんにやってはいけない事をやってしまったと言っていました。だから、そのために、今こうして、憑いている、と」

「……昔……」

昔。

それはいつたいどれぐらい前の話しなんだろうか。

もし、本当に神様なら、悠久の時を生きてきたはずだ。

その昔と言ふなれば、かなり年月をさかのぼらなければならぬ。

けれど、私に対して、となると話しは別。

そんなに古くはならない。

けれど、どの時点なのかは、良く分からない。

……というのは、嘘。

私がここで一生懸命に祈ったのは二度。

そして、今回の事を外せば……

「真帆^{まほ}さんはちゃんと覚えてるみたいですね。とりあえず、彼はそれを謝りたいらしいです。だけど、どうすればいいのか分からないとも言っていました」

目の前で志麻^{しま}君が何か言っているが、いまいち頭に入って来ない。

昔の事だけで一杯一杯。

泣きくれた日々。

たった一つの真摯な祈り。

けれど、決して届かなかった祈り。

「せっかくだから、少し話してみてもどうですか？」

だから、彼がそう言って、場所を離れた事にも全く気付かなかった。

目の前に、再度ストーカー一号が……

神威^{かむい}が戻ってくるまで。

「私にとつては、ちよつとした暇つぶしだったんです」

彼は、戻ってくるなり、そう言った。

その眼は珍しく感情で揺れている。

「このように寂れた社ですから、参拝になんて着ません。もちろん、真摯にお願いしに来る人なんて来るはずありません。ですが、その中で、貴方が居た。だから、ちよつとした手心だったんです」

私は、以前もここに来た。

そして、一生懸命に祈りを捧げた。

泣きながら。

晴れの日も風の日も雨の日もここに来て祈りを捧げた。

お父さんを。

病気で倒れ、危篤になったお父さんを助けて欲しい、と。

そして、その願いは叶い、お父さんは助かった。

だけど……

「ですが、いくら神と言ったところで、出来る事と出来ない事があります。命のともし火が消えてしまった物を、再度蘇らせる事は、いくら神である私でも無理です。ですから、一瞬の儚い灯火をつけるので精一杯だったんです」

すぐに、また危篤になった。

そして、あっさり死んでしまった。

もちろん、その間もまた祈りに来た。

けれど、今度は、どんなに願っても叶う事はなかった。

声も涙も枯らしながら、願っても、祈っても、叶う事はなかった。

その日からだったと思う。

私が、こんな性格になってしまったのは。

「私の手心が、こんな事になるとは思いませんでした。本当に申し訳なかった、と思いました。あれだけの真摯な願いをかなえられない自分の無力さに打ちひしがれました。何が、神だとも思いました」

全知全能。

全てを自由自在にこなす事が出来る。

それが神と言われていた。

だけど、現実には、それ。

人一人助ける事が出来なかった。

それが、情けなかった。

「だから、せめてもの償いとして、今度こそ貴方の力になりたかった。全力で貴方に幸せになって欲しかったんです。自分勝手な事とは知りながらも」

結局は自己満足。

そういいたいのだろう。

勝手に、横槍を入れて、勝手に護って、勝手に幸せにしようとする。そこには、私の意思が全く入っていない。

だから、自己満足。

はつきり言って、嫌いな事。

「何泣きそんな顔をしてるのよ」

だけど、彼の顔は、今にも泣きそんな顔。

神様のくせに神様らしくない。

そういえば、さつき志麻君が言っていた伽耶姫かやひめと言うのも、なんだか神様らしくなかった。

もしかすると、意外と神様も人とたいして変わらないのかもしれない。

「すみません。辛いのは、いつだって、真帆まほさんなんですよね」

そして、彼の場合は、なんだかんだ言って、繊細なのかもしれない。

「そうね」

だったら……

「だったら、今までの分、しっかりと、それこそ馬車馬の如く働いてもらうから」

こっちが気を使っしかないだろう。

それに、一応神様なんだから、多少は使えるだろうし。

「その代わり、四六時中べったりは勘弁だからね」

とりあえず、プライベートは確保して置かないと。

「へえ、許しちゃったんですか？」

とりあえず、事後報告として、その事を志麻君しまに話してみると、興味深そうにしていた。

「てつきり、怒って、喧嘩別れかと思ったんですが」

どうやら、志麻君しまの中ではどうにも、私はキレイやすいカルシウム不足女と思われているらしい。

「まあ、反省してるみたいだし、元々お父さんは助からない病気だったんだから、仕方ないでしょうよ。それに……」
回復した時。

あの時、少しだけ話したけれど、その時お父さんは。

『お父さんの事を心配してくれてありがとう。お父さんはお前の事をいつだって見てる。だってお前の事が好きだからね』
そう言っていた。

今まで忘れてしまっていたけれど、お父さんはそう言っていた。
もし、あの時、神威^{かむい}が手心をくれなかったら聞けなかった。

『綺麗な神様に会ったよ。全身白尽くめで眼だけが赤い神様だった。その人は、お父さんにこう言ったよ。素敵な娘さんですね、って。一生懸命にお父さんの病気を治してください。そう言ってくれたから、奇跡を起こしたくなったって。だから、お父さんも彼にお願いしたんだ。娘の事をお願いします、て』

そして、最後にそう付け加えた。

だから、ホントは感謝しなくちゃいけない。

そう思った。

そう思えたから、許せたんだと思う。

とはいえ……

「ちよ、ちよつと、伽耶姫^{かやひめ}、さすがに、鞭は……!!」

「あら、乙女心を踏みにじった男には、これぐらいの罰がちょうどいいのよ」

「明らかに、貴方の趣味でしょう!!」

「おーほっほっほお!!」

まあ、これぐらいの罰を与えておいたほうがいいだろう。
というか、志麻^{しま}君に憑いている神様って……

いや、まあ、あえて言うまい。

（後書き）

これは、昔人にお願いされて書いた奴なんだよねえ……
代わり、絵をもらったんだけど……
もらった物との質が見事に等しくなかつたんだよねえ W W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0007d/>

神様の罪滅ぼし

2011年1月16日01時30分発行